朝日新聞
2011年(平成23年)11月2日 水曜日 13版▲ 第2石川 22

いしかわスクエア

金沢大学 探訪 13

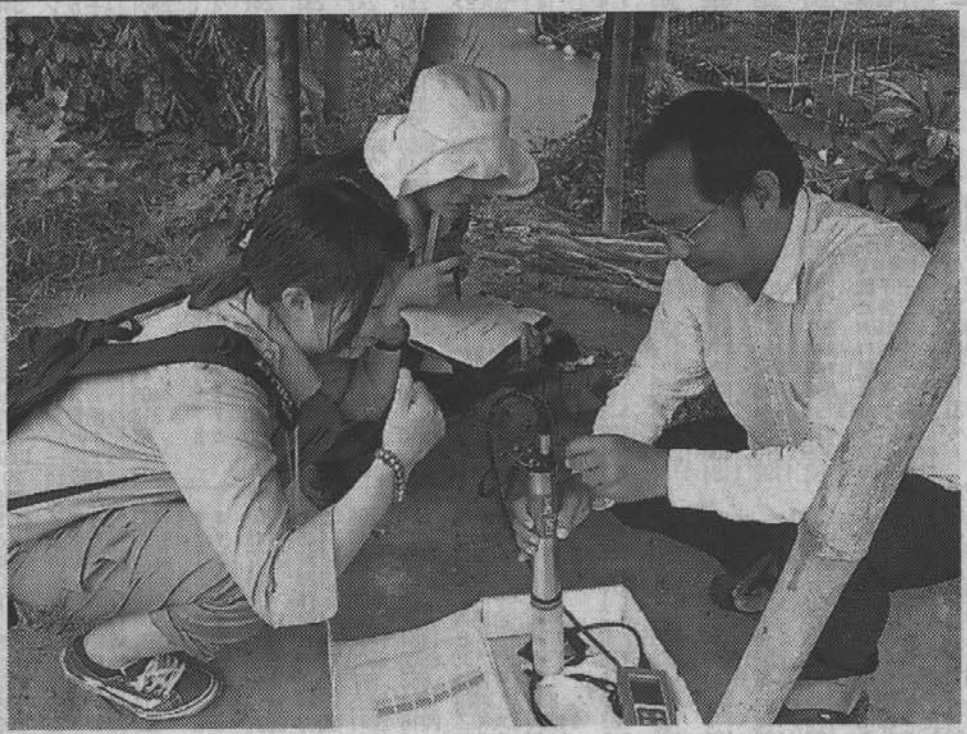
カンボジアの「資産」守れ

環日本海域環境研究センター
塚脇真二教授

世界文化遺産の白眉ともいえる壮麗なアンコール遺跡群、世界最高の淡水生物多様性を誇り、季節によって面積が7倍にも変化するトンレサップ湖――。小国ながらも人類共通の資産があるカンボジア。長年の戦乱から見事に復興を遂げた一方で、観光産業や社会経済のいびつな発展によって遺跡や自然は破壊の危機に瀕している。

私は1992年からカンボジアで調査活動を開始した。まず、地質調査の結果に基づき、同国の自然環境の基盤といえるトンレサップ湖が、季節変化はあるものの、その環境は安定しており、将来にわたり存在しうることを明らかにした。

だが、2000年に環境破壊の兆候が見え始めた。そこで、湖の生物多様性を地質、水文、植物、動物の各分野から共同研究者たちと総合的に解析。季節によって伸縮を繰り返す特異性と湖畔の森林とが豊かな生態系を支えていることを証明した。



アンコール遺跡公園で、水質調査に取り組むインターンシップの金大生ら

05年には、これらの結果を踏まえ、カンボジア国立アンコール遺跡整備公団とともにアンコール世界遺産をとりまく自然環境の調査に着手。現在、大気汚染や水質汚濁といった環境汚染の進行に警鐘を鳴らすとともに、その結果を同国の環境政策に反映させることを試みている。

一方で、アンコール遺跡群や自然、そして住民たちの生活を将来にわたって守り続けるためには、次の時代を担う人材育成も必要だ。10年、金沢大学はアンコール遺跡整備公団と交流協定の締結。カンボジアの若手研究者や学生を金沢大学に招くとともに、金大生を公団でのインターンシップに派遣し、相互理解にもとづく人材の育成に努めている。